

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況（内規第 11 条 活動報告）

団体名	和	国際鉱物学連合
	英	International Mineralogical Association (略称 IMA)
	団体 HP (URL)	https://mineralogy-ima-wordpress.website/ (日本学術会議が加盟していることの記載 有 ・ 無)
国際学術団体における最近のトピック (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)	<p>国際鉱物学連合 (IMA) は、1958 年に設立された組織であり、鉱物学の発展と国際的な協力を促進する役割を担う。IMA の使命は、鉱物の標準的な命名と分類の確立、新鉱物の認定、鉱物学の教育や研究の支援、国際的な鉱物資源の保護と活用を推進することである。IMA は5つのコミッション：CNMNC (新鉱物分類命名コミッション)、CM (博物館コミッション)、COM (鉱石鉱物コミッション)、CPM (鉱物物理学コミッション)、CGM (宝石物質コミッション)、CAM (応用鉱物学コミッション) や、3つのワーキンググループを通じて新しい鉱物学的課題に対応し、学術的な知識の普及や地域社会との連携を図っている。各国の鉱物学組織からの代表者や専門家によって構成され、IMA はその活動を通じて鉱物学分野の世界的な標準化と進展をリードしている。</p> <p>IMA では、鉱物学における新しいトピックに対応するため、2022 年に 3 つのワーキンググループが設立された。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ナノ鉱物学 (Nano-Mineralogy) は、少なくとも一つの次元が 100 ナノメートル以下の鉱物 (ナノ鉱物や鉱物ナノ粒子) の研究を対象とする分野である。ナノ鉱物は、従来の大きさの鉱物と異なる物理的・化学的性質を持つことが多く、地球システム内での栄養素循環や炭素貯留、汚染物質の除去など、重要な生物地球化学的プロセスで独自の役割を果たす。高解像度技術の進展により、ナノ鉱物の特性や反応性の解明が進み、新素材の開発や多様な技術応用に寄与する可能性がある。 2. バイオミネラルと環境 (Biominerals and Environment) は、生物の活動によって細胞内外で形成される鉱物であるバイオミネラルを研究する。バイオミネラルは、生物地球化学サイクルや環境の変化において重要な役割を果たし、環境問題の解決や持続可能な技術の開発に貢献する可能性を持つ。このワーキンググループは、バイオミネラルの研究者に情報交換や科学の発展を推進する場を提供し、環境科学および人間活動との関係を解明することを目的としている。 3. 鉱物情報学 (Mineral Informatics) は、データから情報を抽出し、データ共有の文化を促進することを目指す分野である。オープンアクセスと信頼性の高いデー 	

	<p>タリソースは、鉱物学の進展に不可欠であり、IMA のワーキンググループはデータのアクセス向上や分析方法の標準化に向けた取り組みを進めている。この分野はデータの相互運用性や再利用性を重視し、鉱物学研究のためのデータ資源と分析・可視化方法を開発・普及している。</p> <p>これらのワーキンググループの活動は、新しい鉱物学的課題に対応し、学術の進展を IMA が積極的に支援していることを示している。</p> <p>また、IMA は推進体制の強化の一環として 2024 年に調停委員会 (Mediation Committee) を設立した。この委員会は、内部の意思決定やコミュニケーションの円滑化を目的とし、透明性と効率性の向上を図っている。これにより、鉱物学分野における国際的な協力体制が強化され、IMA が掲げる学術進展と社会貢献に向けた取り組みがより効果的に推進されることが期待されている。</p>
<p>当該国際学術団体が対応する分野において学術の進歩に貢献した事例</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本で最近発見された新鉱物の一例に、「北海道石 (hokkaidoite)」がある。北海道で見つかったこの鉱物は、日本初の多環芳香族炭化水素鉱物であり、炭素と水素のみからなる天然結晶である。紫外線を当てると、黄色や黄緑色の蛍光を放つ。北海道石は 2023 年に国際鉱物学連合 (IMA) によって正式に承認された。そのほか最近では日本国内において見つかった「不知火鉱 (Shiranuiite)」「宮脇石 (Miyawakiite)」などが新鉱物として承認されている。このように、IMA の新鉱物、命名、分類コミッション (CNMNC) は、社会において鉱物学の標準的な分類と呼称の統一に貢献しており、鉱物の保全や科学的理解、社会での利用を推進する上で重要な役割を果たしている。 ・ IMA の鉱物物理コミッション (CPM) は、2022 年からアフリカ放射光会議において研究発表を行い、放射光技術の鉱物物理学への応用とその重要性を開発途上のアフリカの国々にアピールする活動を展開している。この取り組みは、アフリカ大陸における放射光研究基盤の発展と、鉱物物理分野における放射光利用の普及を目指している。さらに、科学技術の地域間連携や能力構築に貢献している。CPM は、アフリカの研究者と協力し、放射光施設の利用方法や鉱物物理学への応用例を紹介することで、地域の研究者の技術向上を支援し、国際的な知見の共有を促進している。この活動は、IMA が学術の進展を支援する具体例であり、国際的な協力体制の強化にも寄与している。 ・ 太陽系内惑星探査においてサンプルリターン計画に携わり、惑星を構成する物質 (鉱物) の特性を解明しつつある。太陽系内天体より持ち帰られた試料を分析し、これらの天体に存在する鉱物の組成、結晶構造、形成条件などを明らかにすることにより、太陽系内惑星の起源や進化のモデル構築に重要な役割を果たしている。このような鉱物学的研究は太陽系全体の形成過程や惑星進化に関する新たな知見を提供し、学術的な

	<p>進歩に大きく貢献している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・我が国は大水深・大深度掘削を可能とする科学掘削船「ちきゅう」を保持し、海洋プレートの上部から人類未到のマントルまでの海洋プレート標準物質採取に挑戦するという目標は、全世界に向けて周知され、鉱物学は、この海洋だけでなく陸上も含めた国際科学掘削コミュニティの中核である。これらのデータは地球の固有の特徴であるプレートテクトニクスへの理解だけでなく、大気-海洋-岩石圏の鉛直的な時系列データの統合解析により、中・長期的なジオハザード予測、温室効果ガス等の地層処分、クリーンエネルギー源の確保など、人類の持続可能性に資する経済的・産業的価値の創造につながる。さらには、地下生命圏の鍵ともなる。これらは、鉱物学による鉱物の形成論や鉱物-水反応の理解に基づいている。
<p>政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等</p>	<p>人類の生存のために、 Future Earth が鉱物科学においても、重要な潮流になっている。特にこの分野では環境汚染の改善に資する環境鉱物学が重要な研究テーマになっている。</p> <p>SDGs の目標のうち、次の 3 つの目標が関係する。</p> <p>目標 6「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」：これに関して、地下水汚染の問題や、休廃止鉱山からの環境汚染の問題に取り組んでいる。</p> <p>目標 7「すべての人々の安価で信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する」：これに関して、化石燃料や海底資源を含む鉱物資源の開発は鉱物科学の重要なテーマである。</p> <p>目標 14「持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する」：これに関して、上述と同様、海底の鉱物資源（マンガン団塊やコバルトクラスト、レアアース資源など）の探査と開発は重要なテーマである。</p>
<p>日本人役員によるイニシアティブ事項や日本の参加によって進展や成果があった事例</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ IMA において日本人の役員が果たしてきたリーダーシップは、鉱物学の国際的な発展に重要な貢献をしている。2024 年から大谷栄治氏が IMA の会長を務め、IMA の運営において中心的な役割を担っている。これに加えて、大藤弘明氏がセクレタリーに就任し、国際会議や活動の円滑な進行を支えている。この体制は、日本の鉱物学者が持つ技術的知見と高い研究の質を反映し、各国の会員にとって有益な成果や方針が策定される基盤を提供している。 ・ 新鉱物命名分類委員会 (CNMNC) において、我が国研究者が新鉱物命名に重要な役割を継続し大きく貢献している。その努力が評価され、我が国の研究者が、この委員会の委員長に選出された(宮脇律郎氏, 2018-2022 年)。 また、大谷栄治氏が委員長であった鉱物物理委員会 (CPM) の働きかけによって、Springer 社の国際誌 Physics and Chemistry of Minerals(PCM 誌) を CPM のオフィシャルジャーナルとした。近年も CPM では井上徹氏や土屋旬氏が副委員長を務め、PCM 誌での CPM 活動報告書のとりまとめや新たな研究手段の開拓やアウトリーチ活動に寄与している。こうした日本人役員のリーダーシップと取り組みによ

	<p>て、IMA は鉱物学分野の国際協力をさらに強化し、持続可能な資源利用や学術的な進展を支援する体制が一層整えられている。</p>
<p>当該団体に加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民にとってのメリットや変化</p>	<p>学術的な国際連携: IMA に加入していることにより、日本の研究者や学術機関は世界中の鉱物学者とつながり、最新の研究成果や技術情報を共有できる。これにより、日本国内での鉱物学研究の発展に寄与し、国際的な研究プロジェクトへの参画も促進される。</p> <p>標準化と研究の質の向上: IMA が提供する鉱物の標準的な命名・分類のガイドラインに従うことで、日本の研究が国際的な基準に準拠するようになる。これにより、日本の研究成果が国際的に認められやすくなり、学術論文や研究活動の信頼性が高まる。</p> <p>国内学会との連携: IMA 小委員会の国内関係学協会には日本鉱物科学会、日本地質学会、日本資源地質学会、日本宝石学会、日本結晶学会、日本高圧力学会が挙げられる。IMA 小委員会の委員の多くはそれら学会の会員であり、委員を通して関連する学会と連絡をとり情報共有やコミュニケーションを図っている。さらに、日本鉱物科学会の理事会（年3回の定例理事会および臨時理事会）に出席し、IMA の動向や活動、各コミッションの活動等の情報共有を行っている。日本鉱物科学会ホームページにおいて IMA 小委員会のページ(https://jams-mineral.jp/about/ima-jams/)を設け、委員の紹介と委員会の議事録のアップロードにより活動報告を共有している。</p> <p>国内における国際会議の開催への貢献と日本の活動と成果の国際発信: IMA 小委員会委員は、国内で開催される国際会議の成功のために、LOC メンバー、セッション提案者、プログラム委員などとして貢献している。具体的な事例としては、① 2016 年 6 月 27 日～7 月 1 日に開催する Goldschmidt conference（横浜で開催）においては、プログラム委員、LOC のメンバー、招待講演者として会議の成功に大きく貢献した。③日本地球惑星科学連合（JpGU）（幕張で開催）においては、継続的に関連するセッションのスポンサーとして、セッションコンビーナ、招待講演者として、この会議の成功に努力し貢献している。さらに、2012 年以降 Mineral and Museum 国際会議の日本招致の活動を行っている。さらに、IMA において、我が国からの提案によって、Springer の国際誌 Physics and Chemistry of Minerals を鉱物物理コミッション（CPM）のオフィシャルジャーナルとした (http://link.springer.com/article/10.1007/s00269-014-0688-7)。また、IMA の中心的な出版物である Elements の経営に鉱物科学会として参画し、紙面 1 ページが日本の活動紹介ページとして割り当てられている。この雑誌を通して、日本の鉱物科学コミュニティーの活動を国際的に発信している。</p> <p>新鉱物・命名・分類の活動: この活動は、学術活動の根幹を保証し、生涯学習活動を通じて広く一般国民向けの普及とリテラシーの向上に不可欠なものである。 IMA 小委員会は鉱物</p>

科学会と一体となり、新鉱物の発見の認定と命名の活動を行っている。新鉱物、命名、分類コミッション(CNMNC)は 1959 年以來、新種鉱物の認定、鉱物種の再定義と既存種の抹消に関する申請などを審査し認定を行っている。現在、我が国を含めて 34 の国と地域の代表委員により構成されている。IMA のこのコミッションは、国際的な共有の命名規約を維持することにより、非科学的な新種設定、研究者間での命名不一致など、学術の混乱を招く命名を排除することで、学術的意義を備えた鉱物科学の発展と国際的な相互理解に貢献している。現在、この委員会で認定された鉱物種は 6000 余りで、近年は毎年 100 種を超える新種が審議されており、この 5 年間で 1 割増という自然科学では驚異的な進歩を遂げている。これは、鉱物学での未知分野が未だ多く残され、その解明は加速されつつある現状を表している。我が国の具体的な活動事例としては、我が国からも、毎年 2 種程度の新種鉱物が申請され、そのほとんどが承認されている。これは、世界のトップレベルである。IMA の日本代表委員を補佐するために、国内唯一の非生物の自然史の分類学の責務を負う日本鉱物科学会に国内委員会を設け、国内で発見された新種鉱物候補や、分類の見直しなどの申請の促進を図っている。このような我が国の新鉱物・命名・分類活動への世界的な貢献のために、新鉱物・命名・分類コミッションの委員長に宮脇律郎博士(科学博物館)が選出され(2018-2022)、我が国の代表委員に門馬綱一氏が就任し、この分野の活動のリーダーシップを発揮している。

教育・社会への影響: IMA の活動を通じて得られる知識は、鉱物学や地球科学に関する教育の充実にもつながる。学校教育や科学館の展示などで、最新の学術情報や鉱物に関する理解が日本国民に提供される機会が増える。また、新しい鉱物の発見や認定が報道されることで、一般市民の科学への関心を高める効果もある。具体的な事例としては、国際ジオパーク活動推進の中心メンバーとして活動し、ヒスイの産地として著名な糸魚川のフォッサマグナミュージアムなどの地方の博物館、各大学の博物館・標本館、そして拠点としての国立科学博物館や産業総合技術研究所地質標本館をネットワークで結び、自然と環境を理解するための啓蒙・普及活動を行っている。さらに、国民への鉱物科学の普及のために、IMA 小委員会グループと鉱物科学会は、平成 25 年文部科学省の事業として、「一家に 1 枚 鉱物ー地球と宇宙の宝物ー」ポスターを製作し、国民の教育と科学リテラシー向上のための普及活動を推進した。これは、日本学術会議の提言「持続可能な未来のために教育と人材育成に向けて」に貢献するものである。

持続可能な資源管理: 日本は鉱物資源が限られているため、IMA を通じて得られる国際的な知識や技術は、資源の持続可能な利用に役立つ。これにより、環境保全と経済的発展のバランスを考慮した政策立案が可能になり、長期的な資源管理に貢献する。

国際的なプレゼンスの強化: 日本の鉱物学者が IMA の役員を

	<p>務めることで、日本の鉱物学界の国際的なプレゼンスが高まり、日本の科学技術の優れた面が世界に発信される。これにより、日本学術会議や関連学会の影響も国際的に強化される。</p> <p>費用対効果の高さ: IMA への加盟費用は年額 500 米ドル程度と少額であり、他の国際学術組織の加盟料と比べても負担が少ない。この費用で、日本の学術界が IMA を通じて得られる学術的な連携、研究の質向上、国際的な発信力強化など、数々のメリットを考えると、非常にコストパフォーマンスが高いといえる。こうした支出は、日本の鉱物学の国際的な影響力を保つために十分な効果を生んでおり、限られた予算で効率的に国際協力を推進できている点が評価されている。</p>
<p>その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）</p>	<p>IMA は、鉱物学の国際的な協力と研究の発展を目的としている。若手や女性研究者の積極的な参加を推進し、研究倫理やデータの透明性を重視している。学術的な成果が公正に評価されることを目指し、鉱物命名に関する基準を設けて国際的な規範を守り、科学の進展に貢献している。</p> <p>IMA は若手研究者の参加を促進するため、数年前から Ph.D. Student Award を導入している。この賞は、博士課程の学生 3~5 名に対して総会への参加費用を支援することを目的としている。2022 年には東北大博士課程の学生が同 Award を受賞し、フランス・リヨンで行われた IMA 総会に参加・発表を行った。こうした経済的支援は、若手研究者が国際学会に参加し、研究発表や交流を通じて学術的に成長する機会を提供し、鉱物学分野でのキャリア形成に大きく寄与している。</p>

2 今後の予定について（内規第 11 条 活動報告）

<p>総会、理事会の日本開催の予定（招致等の予定も含む）</p>	<p>第19回総会は2006年に日本（神戸）で開催した。今後の招致の可能性について議論を開始しているが、4年に1回の開催なのでかなり先になる可能性が高い。</p>
<p>日本人の役員立候補等の予定</p>	<p>2021年より大藤弘明氏がカウンスルメンバーに選出されている。2022年には、大谷栄治氏がIMA副会長に立候補し選出された。2024年には、大谷栄治氏がIMA会長に、大藤弘明氏がSecretaryに選出された。これらの任期は、それぞれ2年および4年であり、この期間中の役員立候補の予定はない。</p>
<p>現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動き</p>	<p>IUGS（国際地質科学連合）が主導する 100 Geological Heritage Sites（世界地質遺産 100 選）プロジェクトは、科学的な観点から地球の重要な地質遺産を保護し、その教育的・文化的価値を広く認識することを目的としている。世界各地から地質学・鉱物学的に重要な場所を選定し、それぞれの独自の特徴や意義を紹介している。この取り組みにより、地質遺産が地域社会にとって教育的および観光的な資源としても認識されることを促進している。IMA は、この 100 Geological Heritage Sites の選定に貢献しており、日本国内の候補地についても、IMA 小委員会が中心となって推薦するプロジェクトを予定している。</p>

3 国際学術団体会議開催状況（内規第 11 条 活動報告）

総会・理事会・各種委員会等の状況 （過去 5 年間及び今後予定されているもの）	総会開催状況	2026 年（開催地：南京・中国）予定、 2022 年（開催地：リヨン・フランス）、 2018 年（開催地：メルボルン・オーストラリア）			
	理事会・役員会等開催状況	2024 年（開催地：ダブリン・アイルランド）、 2022 年（開催地：リヨン・フランス）、 2021 年（開催地：クラクフ・ポーランド、オンライン併用）			
	各種委員会開催状況	2024 年（開催地：ダブリン・アイルランド、オンライン併用）、 2024 年（開催地：カーディフ・イギリス）、 2024 年（開催地：プサン・韓国）、 2023 年（開催地：東京・日本）、 2022 年（開催地：リヨン・フランス）、 2021 年（開催地：ソフィア・ブルガリア、オンライン併用）、 2021 年（開催地：クラクフ・ポーランド、オンライン併用）			
	研究集会・会議等開催状況	2024 年 European Microscopy Congress（開催地：ダブリン・アイルランド）、 2024 年 European Mineralogical Conference（開催地：ダブリン・アイルランド、オンライン併用）、 2024 年 International Geological Congress（開催地：釜山・韓国）、 2024 年 10th International Conference Mineralogy and Museums（開催地：カーディフ・イギリス）、 2023 年 37th International Gemmological Conference（開催地：東京・日本）、 2022 年 IMA General Assembly（開催地：リヨン・フランス）、 2022 年 International Eclogite Conference（開催地：リヨン・フランス）、 2021 年 European Mineralogical Conference（開催地：クラクフ・ポーランド）、 2021 年 9th International Conference Mineralogy and Museums（開催地：ソフィア・ブルガリア・オンライン併用）			
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況（過去 5 年）	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別	
	会長	2024～2026	大谷栄治	(21-26 期) 会員 <u>連携</u>	
	セクレタリー	2024～2028	大藤弘明	() 期) 会員・連携	
	第一副会長	2022～2024	大谷栄治	(21-26 期) 会員 <u>連携</u>	
	鉱物物理学委員会副委員長	2022～	土屋旬	(26 期) 会員 <u>連携</u>	
	評議員	2021～2024	大藤弘明	() 期) 会員・連携	
	新鉱物命名分類委員会委員長	2018～2022	宮脇律郎	() 期) 会員・連携	
	鉱物物理学委員会副委員長	2015～2022	井上徹	() 期) 会員・連携	

<p>出版物</p>	<p>1 定期的（年6回） 主な出版物名：Elements</p> <p>2 不定期（ ） 主な出版物名：鉱物物理コミッション活動報告書(2018-2022) Comodi, P., Tsuchiya, J. & Ghosh, S. Activity report of the Commission on Physics of Minerals (CPM) (2018–2022), <i>Physics and Chemistry of Minerals</i> 51, 1 (2024). https://doi.org/10.1007/s00269-024-01268-7 IMA CNMNC newsletter, in <i>European Journal of Mineralogy</i> (新鉱物命名分類コミッション報告) 21 Oct 2024 IMA Commission on New Minerals, Nomenclature and Classification (CNMNC) – Newsletter 81 Ferdinando Bosi, Frédéric Hatert, Marco Pasero, and Stuart J. Mills <i>Eur. J. Mineral.</i>, 36, 917–923, https://doi.org/10.5194/ejm-36-917-2024, 2024 15 Aug 2024 IMA Commission on New Minerals, Nomenclature and Classification (CNMNC) – Newsletter 80 Ferdinando Bosi, Frédéric Hatert, Marco Pasero, and Stuart J. Mills <i>Eur. J. Mineral.</i>, 36, 599–604, https://doi.org/10.5194/ejm-36-599-2024, 2024 25 Jun 2024 IMA Commission on New Minerals, Nomenclature and Classification (CNMNC) – Newsletter 79 Ferdinando Bosi, Frédéric Hatert, Marco Pasero, and Stuart J. Mills <i>Eur. J. Mineral.</i>, 36, 525–528, https://doi.org/10.5194/ejm-36-525-2024, 2024 05 Apr 2024 IMA Commission on New Minerals, Nomenclature and Classification (CNMNC) – Newsletter 78 Ferdinando Bosi, Frédéric Hatert, Marco Pasero, and Stuart J. Mills <i>Eur. J. Mineral.</i>, 36, 361–367, https://doi.org/10.5194/ejm-36-361-2024, 2024 06 Feb 2024 IMA Commission on New Minerals, Nomenclature and Classification (CNMNC) – Newsletter 77 Ferdinando Bosi, Frédéric Hatert, Marco Pasero, and Stuart J. Mills <i>Eur. J. Mineral.</i>, 36, 165–172, https://doi.org/10.5194/ejm-36-165-2024, 2024 および IMA CNMNC newsletter 79, in <i>Mineralogical Magazine</i>, Vol. 88, 510–513. https://doi.org/10.1180/mgm.2024.45</p>
<p>活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載</p>	<p>()</p>

4 国際学術団体に関する基礎的事項（内規第3条、4条、5条）

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	IMA 小委員会
	委員長名	土屋 旬
	当期の活動状況	<p>第1回 令和5年12月1日 役員の選出 代表派遣 IMA ビジネス会合と EMC2024 メールアドレス共有</p> <p>第2回 令和6年5月14日 第3回地質遺産100選申請の検討 IMA 報告 IMA ビジネス会合派遣 小委員会活動紹介ホームページ</p> <p>第3回 令和6年12月19日(予定) 第3回地質遺産100選申請 IMA 2026 南京 IMA 日本副代表の選出 代表派遣</p>
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	<p>国際学術交流を目的とする非政府かつ非営利的団体である</p> <p>① 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 (http://www.ima-japan.org/)</p>	
	<p>各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている（主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か）</p> <p>① 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる資料の添付又は URL を記載 (https://mineralogy-ima-wordpress.website/wp-content/uploads/2023/04/Amended_IMA_constitution_2014.pdf)</p>	
	<p>下記の事項（ア～エ）のいずれか一つに該当するか（該当するものに○印）</p> <p>⑦ 個々の学術の専門分野における統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの</p> <p>エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</p>	
	<p>10 ヶ国を超える各国代表会員が加入している</p> <p>① 該当する 2. 該当しない</p>	

	加入国数及び 主要な各国代 表会員を 10 記載	(38ヶ国) ・各国代表会員名 (国名) ・各国代表会員名/国名 Mineralogical Society of Poland/ポーランド Mineralogical Society of America/アメリカ Société Française de Minéralogie et de Cristallographie/フランス Science Council of Japan/日本 Mineralogical Association of Canada/カナダ German Mineralogical Society/ドイツ Mineralogical Society of Great Britain and Ireland/英国・アイルラ ンド The Swedish Mineralogical Society/スウェーデン Swiss Society of Mineralogy and Petrology/スイス Geological Society of Australia/オーストラリア Geological Society of New Zealand/ニュージーランド Mineralogical Society of Russia/ロシア
--	-----------------------------------	---

(参考)

国内関係学協会 (主要 6 団体)

日本鉱物科学会、日本地質学会、日本資源地質学会、日本宝石学会、日本結晶学会、
 日本高圧力学会